



漢詩を味わう

第156回

おうけいのせいたいといつきゅうのへきにだいにすにじいんす
次韻王荊公題西太一宮壁其一 黄庭堅

風急啼鳥未了 風急にして 啼鳥 未だ了らず

雨来戦蟻方酣 雨来つて 戦蟻 方に酣なり

真是真非安在 真の是 真の非 安にか在る

人間北看成南 人間 北より看れば南と成る

風の吹き来るのがあまりにも急、声をあげたカラスもまだ鳴きやまぬ。

雨も降ってきて、アリの合戦が今やたけなわのところへ。

絶対的な是や絶対的な非など、はたしてどこに存在するのか。

人間の世では北から見れば南になるし、南から見れば北になるのだ。

《王荊公》 王安石のこと。荊公は爵位。

《次韻》 相手の詩の韻脚に用いられた字をそのまま使つて作詩すること。

黄庭堅は蘇軾と同様に宋代の書と詩ともに代表する人物です。本誌三月号では蘇軾が王安石の詩に次韻した詩を紹介しましたが、今月の詩は、黄庭堅が王安石の詩に次韻して詠んだ詩です。珍しい六言絶句の詩型です。新法党を主導して時の宰相だった王安石は、その革新的な政策を断行したために生前はむしろ評判が悪かったのですが、かれの学識と文学的な才能は万人が認めるどころです。政治的に敵対関係にあった黄庭堅も蘇軾と同

様に政策以外の面では尊敬していました。

この詩を詠んだ前年に、王安石の支持者だった神宗皇帝が亡くなり、王安石の新法党は一気に覆り、旧法党が政権を握りつつありました。

黄庭堅が次韻した王安石詩「題西太一宮壁」は次の内容です。

柳葉鳴蜩綠暗 柳葉鳴蜩 綠暗く

荷花落日紅酣 荷花落日 紅酣なり

三十六陂流水 三十六陂の流水

白頭想見江南 白頭想見す江南を

「柳の葉でセミが鳴き、緑葉が色濃く繁っている。ハスの花に、沈もうとする太陽、どちらも赤さがまっさかりで、今がその絶頂期であるもの、やがて衰頹期を迎えよう。多くの湖沼。流れ行く川の水。私は白髪頭の老人となつてしまったが、故郷の江南を想い起こされ、そこで隠棲したいものだ。」

色濃く繁る緑や真つ赤な蓮や夕陽を政権の衰退期の始まりに擬えています。そして時代の流れを流れゆく川の水に喩えています。新法党の敗退を悟った王安石は政治を離れて故郷に隠棲したいと詠っていますが、同年に政争に破れ失脚し、その後間もなく亡くなります。

黄庭堅の詩は、王安石の詩に次韻して、急激な政争の変転を詠んでいます。自分と蘇軾が属した旧法党が政権を握ったのですが、絶対的な価値の基準に疑問を投げかけています。立ち位置が異なれば、絶対的な是や非などは存在しないと結んでいます。

二つの詩は、背景となる時代性や社会情勢が判らないと、真意が理解出来ない詩です。漢詩は知識人たちが、時には一部の人しか理解できない暗号を使つて政治を暗に批判し意見する重要な手段、装置でした。そしてその時々的心情を今に伝えて残してくれる貴重な記録です。

参考文献・中国詩人選集「黄庭堅」「王安石」(岩波文庫)

柳絮風に乗じ硯水に投じ 竹枝影を動かして窓紗に落つ

柳絮風に乗じ硯水に投じ
竹枝影を動かして窓紗に落つ

《大意》柳の花は風に吹かれて硯池の中に落ちた。竹の枝は影をゆらつかせて窓の薄絹のカーテンに映しだされる。(瞿佑)

水深く魚樂しみを極む 林茂り鳥帰ることを知る

水深く魚樂しみを極む 林茂り鳥帰ることを知る

《大意》魚は水面深いところでこの上もなく楽しみ、鳥は生い茂った林の中にもどることを知る。

読み
世路せいろ
梗ふぎること多しいとと雖いなも
(人生行路は行き詰まりがつきもの)

多 世
梗 路
雖

佐藤象雲書

第二画を中心に縦画の間隔を等しく整える

下部の夕を大きくして上部の夕の下部にもぐり込む形。

旁の八・九画左払いの長さと組み込み方に留意し、横広にならぬよう。

旁が偏に寄り添う形で、終面の右払いを暢びやかに。

この二字の偏の横画は下部に行くに随って右上がり強い

フルトリの筆順に注意。

一般部規定課題出品について
 規定課題は段級の区別なく、前頁掲載の五言句となります。
 ・初段以下の方に限り、前半二文字または後半三文字でも構いません。
 ・規定課題(楷書)の出品はひとり一点に限ります。

連月課題

杜甫詩
 「春 帰」

苔径臨江竹

苔径 江に臨む竹

茅簷覆地花

茅簷 地を覆う花

別來頻甲子

別來 頻りに甲子

歸到忽春華

歸りに到れば 忽ち春華

倚杖看孤石

杖を倚りて 孤石を看

傾壺就淺沙

壺を傾けて 淺沙に就く

遠鷗浮水靜

遠鷗は 水に浮かんで靜かに

輕燕受風斜

輕燕は 風を受けて斜めなり

世路雖多梗

世路 梗ること多しと雖も

吾生亦有涯

吾が生も 亦だ涯有り

此身醒復醉

此の身 醒めて復た酔う

乘興即為家

興に乗じて 即ち家と為さん

草書

行書

多岐 世路 雖

多岐 世路 雖

※成家・師範の随意作品出品は二点までです。

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

次号課題

隸書

有涯 吾生 亦

多岐 世路 雖

吾が生も 亦た涯^{かぎり}あり

(両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと)

支部		順位		氏名	
夕立や					
虹のから橋月は山					

山口素堂

和泉溪石先生書



佐藤象雲書

音

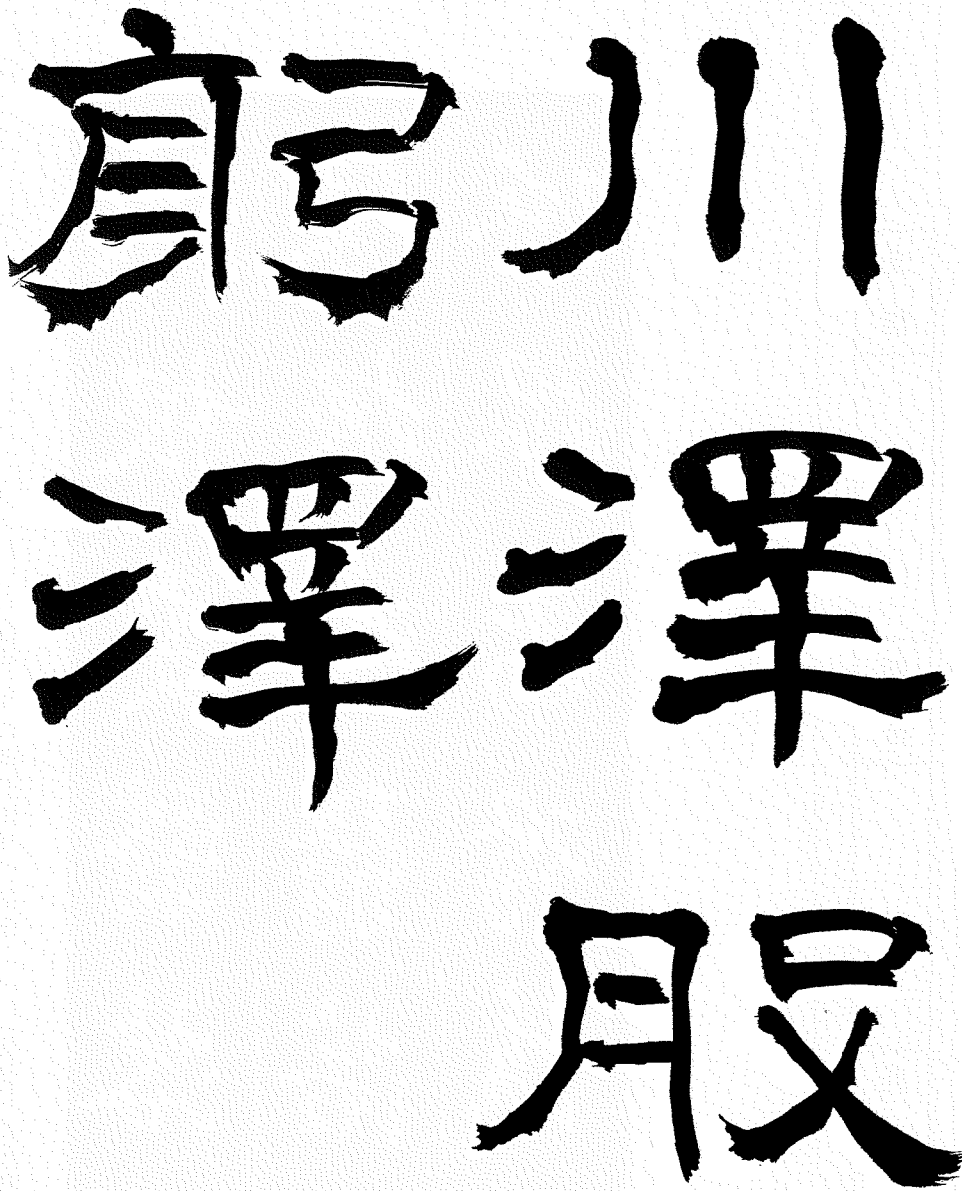
チンコンイエイ
ラクヨウヒヨウヨウ

略解

古い樹根は枯れ
木の葉がひるがえり落ちる



せんたく
川澤、み
躬を股つ
わか



■ せきもんしょう石門頌 (後漢・西暦一四八年) の臨書 (2)

象雲臨

『川澤股躬』

石門頌は岩壁に刻された摩崖石刻です。漢代の八分隸の典型として形質ともに完成されたものとして禮器碑を長期間にわたって勉強してきましたが、禮器碑から見ると、この石門頌は自由闊達で、古拙の魅力があります。

清時代になると金石学が発展し、隸書に対しても様々な評価を見ることが出来ますが、その中に「疎密斉しからずものと深趣を具う。推して東漢人の傑作と為す」というものがあります。そして清末の書家康有為は『芸舟双楫』の中で「隸中にも篆・楷・草あり。……中略……楊孟文(石門頌)は隸中の草なり」と評しています。

今月の四文字は冒頭の部分で、隸中の草と言えりほどの動きはまだ抑えられていますが、「澤・股」は偏旁間を広くして明るくゆったりとしています。あまり線を固くしないで形に拘り過ぎずに暢びやかに臨書してください。

乗
幽
控
寂

幽じゆうにじゆう乗じゆうじじゆう寂じゆうにじゆう控じゆうし……

乗
幽
控
寂

象
雲
臨

■王羲之・集字聖教序(唐・西暦六七二年)の臨書 (16)

『乗幽控寂』

集字聖教序は昔から王羲之の真髓を伝え残すものとして、蘭亭序と共に貴重な存在です。唐時代に二十四年という長い歳月を費やして王羲之の字を集め、石に刻したもので、現在は陝西省博物館の西安碑林に安置されています。長い期間にわたって採拓されたため、表面が磨滅しています。

一般に拓本は古い時期に採られたものほど良いのですが、この集字聖教序は北宋拓本が最良とされています。石碑は後世になって翻刻され、新しい拓本はそれによって拓本が採られる場合が多く、宋拓だけでも百種類以上で翻刻も数十種存在していると言われます。幸いに、日本で発行されている参考図書はその殆どが、信頼のおける印影をもとに作られていて安心して習うことが出来ます。一方で、西安碑林に行かれた方は判ると思いますが、現地ですべての拓本は見た目立派な拓本ですが、すべて採拓用に刻された石や木版からのものです。